

SEALDsの活動から想起されるのは、60~70年代の学生運動だ。

「明日にでも革命を起こす、とあの時は思っていた」そう話すのは学生時代70年安保闘争に身を投じた横山茂郎さん(69)だ。1970年に慶応義塾大学文学部社会学科を卒業した横山さんは今でも原発再稼働反対のデモなどに参加することもあるという。

1960年代の慶應義塾大学にはマルクス主義をベースとした構造改革派の学生が多数おり、彼らの影響で横山さんも学生運動をはじめた。

「あの時は人生で一番勉強した」と横山さんは当時を振り返る。日本がダメになってしまうのではないかという危機感から、仲間内で勉強会を頻繁に行った。読書会を開き、マルクスやケインズ、マックスウェーバーらの思想を学ぶほか、海外が日本についてどう思っているか考えるために海外の雑誌を読み込むこともあった。60年代に乱立していた様々な学生の党派との討論に負けないように様々な考え方を身に着ける必要があったという。

2015年の安保デモを見て横山さんは、街にでて自分の意見を主張することに抵抗感が少なくなったのではないかと話す。70年代は、デモに参加するのは学生のみだったが、現在では10代から80代の幅広い年齢層が参加している。

また、昔は運動が暴徒化し、学生が国会議事堂に突っ込んで捕まるというようなことも頻発したが、近年のデモは法を破らず整然としていることも違いだという。

さらに、当時は既成政党とかかわることはナンセンスという風潮があったが、今の若者は彼らとうまくつながりを持ち、情報共有を行っている。時には、野党の議員がデモ隊の様子を伺いに來ることもあるという。

一連の安保騒動を通して国民は安保法制について知る機会や自ら調べる機会を得た。街に出て自分の意見を表明することは理論武装し、自分の頭で考えるという習慣に繋がる。「デモをしている若者も賛成の人に議論を吹っ掛けられたときに自分がなぜ反対しているか言えるようにならなければならない」と横山さんは話す。